

山村の聞き書き 雑感

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 原島 幹典

「聞き書き」とは、他者から聞いた話を、そのまま筆記した記録のことまたはその行為を指します。森林文化アカデミーでは、山村に暮らすお年寄りの聞き書きをする授業があり、今までに美濃市周辺の山村を中心に、郡上市石徹白、高山市丹生川、揖斐川町春日、大垣市上石津、山県市葛原・北山等で多くの方から貴重なお話をうかがってきました。その活動についてご紹介します。

影響の度合いによって、個々の受け止め方は異なるので同じ話にはなりません。さらに、年齢や性格、性別や職業によって彩られた、この世に一つだけの人生ドラマが語られてゆくのです。

話し手さんが話したいことと、学生（聞き手）が聞きたいこととの間にズレが生じることもあります。大概の場合、話したいことを話してもらっています。が、真面目な学生が次々に質問をして、話し手はそれに答えることで忙しく時間が過ぎてしまうこともあります。こういう場合、聞き書き作品としてはあまり面白くないものです。なぜなら、聞き手が主体の作品になってしまい、話し手の生き様や気持ちを反映する余地が少ないからです。聞き手はあくまでもワキ役で、主役は話し手です。ただ、全部話し手まかせでもだめで、初めに自分がどういいう話を聞きたいのかきちんと伝えるのは当然です。そのうえで、話を深めたい時には、たとえば「すごいですね」とか、「本当ですか！」など、聞き手の感動を表現できると話し手は乗ってくるものです。話の腰を折らぬよう「そのころはどんなものを食べておられたのですか？」「どこでどんなふうに遊んだのですか？」など具体的に聞きたいことを織り込んでゆくのがうまい聞き方でしょう。

お話は録音させていただき、持ち帰って文字起こしをしてゆきます。一度の聞き取りを1時間程度すると、文字数は2万字くらいになります。さらにその文章を編集して読みやすくするので、大変手間のかかる作業です。学生はこの作業をする中で、いろいろなことを感じてきます。話し手の言葉を何度も読み返すうちに、話し手の気持ちを察することができるようになり、実際に話されていないことを想像できたりします。そこまでゆけば十分合格です。聞き書きは、山村生活文化の記録に資すると共に、相手の立場に立つて気持ちを察するコミュニケーション力を磨くうえでたいへん有効な手法だと思います。



聞き手の話ばかりでしたが、話し手さんにも変化が起こるようです。会ったばかりの学生に、家族にも話してなかったことを話す人もいます。他人大からこそ話せたのかもしれない。忘れていたその時の気持ちや、記憶が鮮明にふみがえる人もいます。後日、編集した作品を読まれると、「私の人生も捨てたもんじゃなかった」「家族にも読ませてやりたい」と言って喜んでくださいます。また、地域特有の「謡い」について話してくれた方がその数か月後に亡くなりましたが、聞き手の学生は細かい記録と聞き書き作品を残していたため、遺族の方からたいへん感謝されました。こんな時、貴重なお話を聞かせてくれた山村の方々に、少し恩返しできたような気がします。